開港5周年 富士山静岡空港の未来を展望する

今年6月4日、開港5周年を迎えた富士山静岡空港。これまでの歩みを振り返りながら、今後の空港の在り方と進むべき道を展望する。

外国人出入国者数は地方管理空港で全国1位

交通の要所として、JR東海道線、東海道新幹線、東名高速道路、清水港など、陸と海の交通インフラが整備されてきた静岡県。平成21年6月、そこに空港が加わることで、陸・海・空が一体となった交通体系が完成し、国内遠隔地や海外との交流がより一層活発化するに至った。中でもアジアの国々との交流は、本県の持つ産業・観光など豊かなポテンシャルを基盤として、県内企業の海外進出、農産物の販路拡大、交流人口の増大などを後押しする形となっている。空港が県内経済に与える影響も大きく、静岡県の試算では、開港後4年間で859億円余の経済波及効果があることが認められている。

過去5年間の利用者数の推移を見ると、平成22年度に約56万人であった利用者が、23年度には東日本大震災等の影響により約41万人まで減少した。しかし、24年度以降、新規就航した台北線と福岡線・沖縄線など国内線の好調により回復傾向が見られ、25年度には約46万人となった。外国人出入国者数は全国12位、地方管理空港の中では全国1位となっている。また、本年度は中国路線を中心にさらなる利用者の増加が見込まれている。

利便性と魅力を高め年間利用者数70万人を目指す

羽田空港と中部国際空港（セントレア）に挟まれた富士山静岡空港。両空港を利用していた方を引きつけるのは、難しいという意見もあった。ところが、新東名高速道路の開通によるアクセス向上も追い風になり、富士山静岡空港の誘引力は、次第に強まっている。

コンパクトな富士山静岡空港は、搭乗や通関などの手続きをスムーズに行える。利用者に対するホスピタリティもきめ細かく、空港内の移動距離も少ない。そのため旅慣れた人の中には、大規模な空港を避け、あえて富士山静岡空港を利用するケースもある。また、路線の拡大にも、減便路線（ソウル線）の早期復便、既存定期路線の増便、新規路線（東・東南アジア等）誘致を3つの柱に掲げて取り組んでいる。

富士山静岡空港ならではの特徴を生かしながら、路線の拡大や、空港機能の向上などに努め、その利便性と魅力を高めることで、年間利用者数を70万人に増やすことを目標に掲げている。

多彩な需要を開拓しインとアウトの両面で利用促進

静岡県は、県民の空港利用（アウトバウンド）と就航先から空港を訪れる利用（インバウンド）の双方が、健全なバランスとなる交流を目指している。

世界遺産となった富士山を筆頭とした豊富な観光資源や、食材の宝庫〝食の都〟の魅力等を発信し、国内外からの誘客を図るとともに、ビジネス、教育、観光、地域間交流などさまざまな分野でアウトバウンドを促進していく。各就航先とのインとアウトのバランスが整い、相互に交流が行われることで、県内のさまざまな産業や文化が一層活性化されるだろう。

また、富士山静岡空港は、静岡県が取り組む「地域外交」を支える基盤となることも期待されている。地方と海外の直接交流には、国と国の外交では突破できない壁を乗り越える力があり、時代の要請に俊敏に対応できる柔軟性と機動力を備えている。中国、韓国、モンゴル、台湾、東南アジア、アメリカと経済、文化、観光面などで積極的に交流を進めている本県にとって、富士山静岡空港の意義は大きく、地域外交の展開は、地域間交流による底固い需要の確保にもつながっていくだろう。

地域とともにお客様満足度日本一の空港へ

富士山静岡空港は、地域活性化の拠点にもなっている。開港5周年のイベントでは2日間で2万人の来場者を呼び込むなど成果も上々で、飛行機を利用しない空港見学者も年間約70万人を数えている。

周辺の市町に与えた影響も大きい。空港が位置する志太榛原エリアは、茶産地として知られながらも、地域の一体的な取組は必ずしも進んでいなかった。ところが開港後、近隣の各市町が空港を〝にぎわいづくり〟の拠点として捉えるようになり、最近は市町を越えた取組も軌道に乗っている。行政主導ではない民間レベルの動きも加わり、「お茶」を核とする志太榛原エリアのビジョンの共有化も進んでいる。お茶の味わう魅力に加え、景観としてのお茶の魅力も売り出していく考えだ。こうした取組は、「茶の都しずおか」づくりを推進していく上でも欠かせないものになっている。

周辺地域とも協力しながら、空港の管理運営を行う富士山静岡空港株式会社は「お客様満足度日本一の空港」を目指している。空港内に「おもてなし推進室」を設け、施設案内から周辺の観光情報提供までを一手に引き受けるエアポートコンシェルジュを配置しているほか、国内空港初のトラベルカフェの設置など、空港職員が一丸となって取り組む姿勢には、大規模空港にはできない発想や気配りがあり、富士山静岡空港の魅力を増大させている。

賑わいに溢れた魅力ある〝ふじのくに〟の空の玄関口へ

富士山静岡空港は、静岡県の豊かな自然、多彩な文化、産業などを国内外へ発信する重要な拠点であるとともに、南海トラフ大地震などの広域災害が発生した際には、空路を利用した緊急輸送や支援部隊の基地としての役割も想定されている。さらに、2020年の東京オリンピック開催等にあっては、首都圏の航空需要の一部を分担する可能性も考えられるなど、日本の空の玄関口の一つとして大きな役割を担っていくことが期待されている。

開港当初から指定管理者制度を導入するなど、民間と協力した効率的な管理運営に取り組んできた富士山静岡空港だが、将来的には民間へ空港運営権を譲渡する、新しい運営体制への移行に向けて、地方管理空港の中では先陣を切った検討を始めている。今年度からは旅客ターミナルビルの改修・増築を進め、また、運用時間の延長、空港の交通アクセス改善等にも継続的に取り組んでおり、環境が整った段階、早ければ平成31年度には民間事業者に空港運営権を譲渡する新体制へと移行していく。空港利用者へのより一層のおもてなし機能の充実と利便性の向上を図るとともに、就航先の拡大につなげ、〝ふじのくに〟の空の玄関口にふさわしい、賑わいに溢れた魅力ある空港を目指していく構えだ。

就航以来初！上海・武漢線がデイリー運航開始。これまで週4便で運航していた中国東方航空の静岡-上海・武漢線が10月9日（木）まで毎日運航されることになりました。問合せ：県空港利用促進課054-221-3355